

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

涙を断ち切る文化：
マダガスカル南西部ヴェズ社会における死者への態度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008502

涙を断ち切る文化

——マダガスカル南西部ヴェズ社会における死者への態度

飯田 卓

はじめに

肉親が亡くなると、誰だつて悲しい。だから、肉親が中心となつて組織される葬儀というのは、湿っぽくなつてしまふし、涙がつきものである。湿っぽくなつてしまふというより、意識的に悲しみを演出するよう、参列者が協力しているように思えるふしがある。故人が慕われていたのだということ、最後に確認するかのよう。

だが、このような考えかたは、多くの日本の葬儀についてはあてはまっても、文化的背景が異なればかならずしもあてはまらない。ここでは、わたしが長らく調査してきたマダガスカル南西部のヴェズ社会のことをとりあげよう。この社会では、とくに高齢者が亡くなったときなど、酒を飲みながら歌つたり踊つたりして夜を明かし、おおいに楽しむことによつて通夜の雰囲気盛りあげる。そうすることが、故人への最大の供養だと考えられているのである。

1. ヴェズ社会における葬儀の進行

マダガスカルは、インド洋の西のはし、アフリカ大陸から約四〇〇キロメートル東に位置する島国である。地域ごとに多様な文化がみられるが、島民の話す言語はすべて、オーストロネシア語族に属するマダガスカル語の方言とみなせる。オーストロネシア語族の言語は、マダガスカルのほか、東南アジアやオセアニア各地などで広く用いられてきた。このことが示すのは、インド洋のかなたの東南アジア島嶼部からマダガスカルが文化的影響を受けてきたことである。葬送の儀礼についても、マダガスカルのもものは東南アジア方面と関係が深いという説がある (Deschamps 1965)。

ヴェズの人びとは、マダガスカルの南西海岸部に居住する。彼らの多くは、海で魚をとったりそれを町へ運んだりという水産関係の仕事に従事し、みずからを「海での生活に秀でた者」と自任することが多い (Aquin 1995; 飯田 2008a)。ヴェズの人びとは、一七世紀以降にこの地域を支配したマシクル人のアンデヴラ王国から距離をおきつつ暮らしてきたらしい (飯田 2008c)。ヴェズたち漁民は、農耕民と経済的な関係をとり結ぶだけで、積極的に王国の臣民になろうとしなかったのだと推測される。そして現在でも、自分たちはマシクル人ではないという独立心を維持しているのである。

冒頭に記したように、ヴェズの人びとは、葬儀においてしばしば愉快に時をすごす。しかし、そうした場面は、誰が死んだかによって異なってくる。とくに、故人が多くの子孫を残したかどうか、敬虔なキリスト教徒であるかどうか、葬儀のやりかたに違いをもたらす。以下では、これらの点に配慮しながら記述を進めていこう。なお、葬儀の

やりかたは、村落が都市かによって、また地域によっても異なってくる (Astuti 1986)。以下の記述は、ほとんどの住民が生計の大部分を漁業に依存する村落部のもので、ムルンベという町に近い地域のものである。

誰かが亡くなると、遺族のひとりや二人が、死者が出たことを大声で告げる。口伝で噂が広まるから、何度もくり返す必要はない。この声の届く範囲にある者たちは、とにかく動きをとめて耳をすませる。彼らが告知役に話しかけることは、まずない。そして、故人との関係の近さによって、弔問するタイミングを決める。

このおふれは、死者を出した村のみならず、故人に近しい者がいそうな村でもおこなわれる。したがって遺族は、ほうほうの町や村に告知の使者を派遣する。とくに近しい者に対しては、一刻も早く葬儀に駆けつけることができるよう、帆走カヌーや牛車（ウシに牽かせる車）を迎えにやらせる。

故人が独身だったり、子宝に恵まれなかったりした場合、弔問客は少ないと予想されるから、こうした手間はほとんどかからない。逆に、多くの子や孫をもつ高齢者が亡くなった場合、それら卑属の住む町や村のみならず、その配偶者の実家にまで使いを出すから、手際よく指示を出さなければならない。おそらく、指揮者は悲嘆にくれるひまもないだろう。こうした手配が、葬儀にむけての最初の準備である。

指揮者が慌ただしく采配をふるういっぽうで、故人の安置された家では、しばしば悲痛な慟哭が聞かれる。このような悲しみはかならずしも長時間続くとはかぎらないが、訪れた弔問客は、故人の横たわった寝台のもとにまずひざまずき、その悲しみをあらわす。この時点では、涙を流して死を悼む雰囲気や場を支配しており、弔問者もそうした雰囲気にしたがうよう求められる。

故人の婿や嫁など、下の世代の姻族にあたる人たちは、故人とすごした時間が比較的短いから、涙など出ない場合も多いだろう。しかしその場合にも、悲痛を示すように語尾を長く伸ばしながら、「父さーん」「母さーん」などと顔

を伏せて呼び続ける。しばらくして部屋から出ると、けろりとしていることもあるのだが、少なくとも死者の前では悲しむことが求められるようである。

こうした雰囲気が変わりはじめるのは、夕方である。夜になると、死者の家のまわりでは、夜どおしジヘエ(jhe)と呼ばれる短い文句の輪唱がおこなわれる。これに参加するのは若い男女で、輪唱しながら故人の安置された家のまわりを左回りに駆け足でまわり、しばしばふざけ合つて場をにぎわせる。四〇代以降の年齢層は、これに加わることは少なく、広場に集まつてすわっている。彼らのいる広場では、楽団がテンポの速い曲を奏で、踊りのうまい者がときおりステップを披露して、観客の笑いを誘う。この傾向は、酒が入ることですます拍車がかかるが、酒をふるまつているのはほかならぬ遺族たちである。遺族たち自身が、通夜の場をすすんで宴のように盛りあげているのである。

もちろん、弔問客が少なければ、このようにはいかない。酒で場を盛りあげたところで、じょうずに交代しなけ



葬儀を盛りあげる楽団が隣村から到着。若者たちの気分が高揚しはじめる。

れば場を維持することはむずかしく、けつきよくはしらけてしまうのが落ちである。そのような場合には、キリスト教の賛美歌を詠唱することが多いようだ。村落部では、キリスト教が普及しはじめて数十年にしかならないが、この地域ではカトリック教会が私立学校を運営しているので、若い世代は学校で賛美歌をいくつも教わっている。

また、弔問客が多くとも、故人が敬虔なキリスト教徒の場合には、ジヘエをやらせたり楽団を招いたりせず、一貫して賛美歌で夜を明かすことになる。しかし、このときも遺族たちは、にぎやかに時をすごすよう参列者に奨励する。声高らかに歌った者に対して、とくに多くの酒をふるまうのである (Asutii 1995: 111)。

夜が明けて小鳥がさえずる頃には、ジヘエも賛美歌も中断される。埋葬の日でなければ、次の夜もまた夜更かしをしなければならぬので、参列者たちは日がのぼっているあいだに休息をとる。また、故人を収めるための棺桶も、遺族の男たちが中心となって日中に製作する。あらたな参列者が到着するのも、ふつうは日中である。ジヘエや音楽、賛美歌でにぎわう夜にくらべて、日中は比較的静かな時間が続く。しかし、食事のふるまいの前には、にぎやかにジヘエがおこなわれることもある。参列者は次第に増えるから、昼も夜もにぎわいを増していく。遠方の親族が到着するまで、「通夜」は続けられる。

埋葬の日には、遺体の安置されていた家の東の壁がとり壊される。これは、ガマの葉で屋根や壁をふいた家屋の場合である。都市部では、こうした植物素材の建築が少ないから、家が壊されることはないのだろう。東の壁がとり壊されるのは、西側にとりつけられた入口が小さく、棺桶を出し入れできないためだろう。また、村の西側が海に面しており、墓地が村の東側に位置していることも関係しているよう。こうした東西関係は、多くの村で共通している。家のなかに棺桶を運びこみ、遺体を収める作業をしているあいだ、会計係が香典 (mafalata) の金額を読みあげる。その合計額が多いほど、故人が慕われていたことがわかるわけだ。割礼祭など他の儀礼でも、これは行事の終わり近



故人を収める棺桶の製作。男性たちの共同作業である。



墓地に向かうジヘの隊列。先頭は十字架を背負って走り回る。

くでおこなわれる。ただし、子孫をもたない若者が亡くなった場合には、このようなことはおこなわれない。

家から運び出された棺桶は、牛車に乗せられて、墓地まで運ばれる。村から墓地までは約一時間。四キロメートルばかりあるかと思われる。墓地が村の近くに位置することはまずない (Asumi 1995: 107-108)。牛車の歩みに合わせて参列者は歩いていくが、ここで、最後のジヘエがおこなわれる。ジヘエの一行は、行列の後から駆け足で追いつき、行列の前方にまわりこんでまた後ろに去っていく。ちょうど、彗星が描くような軌道で、行列の周りをまわるのである。このとき、行列を先導していた男も、ジヘエに加わって走り回る。故人の卑属らしきその男は、墓地に立てるための十字架を担いでいるから、走り回るとさうとう疲労するはずだ。しかし、故人への孝行が終わりに近づいたとあって、元気に走り回る。

墓地は、どの村からも離れた藪のなかにある。よそ者が一見しただけでは、墓地とはわからない。石が山のように積み上げられているだけである。十字架や墓標が立っていることが、墓地といえは墓地らしい点であろうか。目をひくのは、故人の使った鍋や食器が転がっていることである。いずれも金属製で、墓場に意図的に残したものだ。日常的に使うものと区別するよう、わざわざ石を打ちつけてへこませたり傷つけたりする。

あたらしい棺桶は、石垣の一角に置かれる。石垣の上方に安置される場合には、棺桶が落ちたり石垣が崩れたりしないよう、周囲が杭で固定される。そして、近傍に転がっている石で棺桶が覆い隠され、かたわらに十字架が立てられる。葬儀はこれで終わりである。帰り道、水場で足を清めて帰ることもある。

村では、しばらくのあいだ、故人の家が壁を壊されたまま放置されている。しかしこれも、やがて、完全に壊されて撤去される。死者を思い出させる景観は、こうして村から消え去ってしまうのである。

2. 理想的な葬儀とは

このように、参加者は葬儀の期間中、とくに夜の時間をにぎやかにすごす。音楽あり、賛美歌あり、ジヘエあり。そのなかでも、ジヘエについては、もう少し詳しく書く必要があるだろう。ジヘエは、数年に一度おこなわれる割礼祭などでもみかけるが、筆者が居合わせたジヘエのほとんどは、葬儀の場で目にしたものだ。ジヘエのようすを詳しく述べれば、葬儀がいかに涙と無縁のものであるか、理解できるはずである。

まず、ジヘエにおいて唱えられる文句を紹介しよう。ジヘエを唱えるときには、多数の声が重なりあい、しかもふだんの発声とは違ったふうに分音されるので、筆者が書きとめることのできたものはわずかであった。しかし書きとめたところで、日常的になにげなく発するような言葉や、意味不明な言葉が多い。「青い灯があかあか灯ってる (Tomaratarara jiro manga)」 「知ってるぞ (Hainay)」 「名声求むべからず (Ka nlia laza)」 「ゆくり運べ (Ka andese hare)」 「*ハハハ*」の土地の水は塩からい (Tana mbao masira rano)」 「頭の赤い太ったホロホロチョウ、曲った赤い鉄砲で撃たれた (Akanga mena loha vondrake tsatsiny la basy mena la midake)」 「飛行機が後ろでうなってる (Boine mangotsoke afara)」 「*くやむイモ* (Bole lo)」 など。民俗の古層の手がかりがつかめるなどと考えていると、拍子ぬけしてしまう。

そうしたなかに、日本の感覚からすればおよそ葬儀に似つかわしくない、性的な文句がいくつもあった。「男たちはまだ胸毛ぼうぼう、女たちはまだグラマー (Nahoda reo nbo be volon-tsatsa, ampela reo nbo kinonean-tsatsa)」 などといった文句だ。その他の文句も、解釈次第では性的な意味にとれるように思えてくる。ひょっとすると、ふだんはたが

いに離れた村に住む若い男女は、逢引の場としてこのにぎわいを楽しんでいるのではないだろうか。

ジヘエの参加者は、ありったけの声を出しながら、家のまわりを走りつづける。いつしか息があがって顔は紅潮し、ちよūdど興奮したのと同じ状態になる。ジヘエだけに集中しているというわけではない。ふざけ合い、笑いながら、ジヘエは展開する。「Kamilalaza（名声求むべからず）」というべきところを、「Kamiladrala（金銭求むべからず）」という替え歌にすることは、若者たちのお気に入りである。ふざけて笑い転げる者もいる。たんに慣例にしたがつておこなっているというより、葬儀のときにしかあじわえない楽しみを、せいじっぱい楽しんでいるようにみえるのだ。

このような場の盛りあがりは、よいものとして評価されている。割礼祭などの祭においてと同じように、盛りあがった葬儀はいつまでも人びとの記憶に残る。筆者自身、ジヘエに参加した経験は数えるほどしかないが、数年たったのちでも「○○さんの葬式のときには楽しかったね」と話しかけられることがある。また、あたらしく村に嫁入りした女性と話しているとき、相手が初対面だと思っていると、「○○さんの葬式のときに一緒にジヘエに参加したじゃない」と言われることもある。暗くて顔などわからないのだが。

祭が盛りあがったことを、ヴェズ語では「マレサケ (malesake)」あるいは「マサケ (masake)」と表現する。前者は、「変わったできごと」「ニュース」を意味する名詞で、大盛会という意味にも大惨事という意味にも使われる。「マサケ」については、少し詳しい説明が必要だろう。この形容詞は、果物が「熟した」あるいは料理が「できた」、料理に「火がとおった」という意味で用いられる。葬儀がマサケだったということは、その葬儀が、本来の目的を十全にはたすような状態にまで達したということであろう。葬儀は、参加者の興奮を最高潮にまで高めることで、その本来の目的をはたすのである。その目的が何なのかは、よくはわからない。死者の靈魂を慰めることかもしれない

し、参列者の親族的つながりを再確認することかもしれない。しかし、筆者は次のように考える。葬儀における参列者の興奮は、遺族の涙や悲しみを断ち切り、そのことによって生者と死者の区別を明確にする。そのことが、ほんらい葬儀において期待されてきたのではないだろうか。

3. 涙を断ち切る

すでに述べたように、故人の近親者とくに配偶者は、故人の死にのぞんで深い悲しみを示す。とくに故人が高齢のときは、配偶者も高齢で墓地まで同行できないため、最後の別れとなる出棺のときには、顔を伏せて泣いている。おそらく、臨終のときをのぞけば、遺族にとつては出棺がもっとも悲しい場面になるのだろう。しかし、葬儀の期間をとおして、配偶者はずっと悲しい時間をすごしているはずである。配偶者のようすをずっと観察したわけではないが、配偶者が酒をふるまったり一緒に踊ったりしている場面を筆者はみたことがない。悲しみのかけらも感じられない祝祭空間のなかで、配偶者は、孤独な悲しみに耐えているのである。

どんなに祝祭的な葬儀でも、悲しみにくれる人はいる。しかし、多くの人びとは、そうした悲しみが「場ちがい」だと認め、悲しみをできるだけ断ち切る方向に場を仕立てあげている。だからこそ、いかに悲しみにくれた遺族でも、お祭り騒ぎに水をさすようなことはしない。遺族もまた、場ちがいな悲しみを乗りこえて、できれば祝祭的な雰囲気と同化しようとしているのかもしれない。そうだとすると、葬儀の参列者たちは、涙を断ち切ろうとする遺族を助けているのだとはいえないか。

こうした意見を受け入れてもらうには、ヴェズ社会において生と死が截然と区別されていることを示す必要がある

う。筆者が調査した地域から離れた地域でヴェズ社会を調査したアストウティは、ヴェズの人びとが死者をできるだけ遠ざけていると論じている。墓地は村から遠く離れているし、藪に覆われていて近寄っても見えない。埋葬のとき以外に人がそこに近づくのは、タブー (tabù) である (Astin 1995: 107-109)。さらには、イタリアから来た絵葉書のなかで墓地が家のすぐ近くにあるのを見て、信じがたいといった反応を示したという (Astin 1994)。

このことは、筆者の調査した地域でも同じであった。ふだん墓に近づくべきでないのはむろんのこと、死者の名まえを口にしたり、字に書いたりするのもタブーであった。死者をこの世に呼びだすのと同じだというのである。死者の名まえは、墓地に立てられた墓標や十字架に記すだけでじゅうぶんなのだ。

故人の生前の写真を残すことすら、かつてはタブーであった。ヴェズの村で撮った写真を日本で現像し、次の訪問時におみやげとして配っていたとき、思いがけないことが起こった。写真の何枚かが、わたしの目の前でことわりもなく破られたのである。何が気に入らなかったのか、最初、わたしにはわからなかった。よくよく聞いてみると、わたしが日本にいるあいだに亡くなった人がいて、その人が写真に写っていたというのである。日本人の感覚ならば、せめて撮影者のいないところでこっそり破るところである。いかに死者が忌み嫌われているかが推しはかれよう。ただし近年は、死者の名まえを口にすることや、その写真を手元に置くことは、次第に許容されるようになっていく。

墓の写真をとりたいたいと思つて、埋葬以外の日に墓地に行きたいと村人に頼んだことがある。もちろん願いはかなえられなかったが、そのときに理由を聞いてみた。それによると、祖霊 (Fas), 「祖先」「祖父母」「尊属」といった意味もある) は厳格 (masiake) だからだという。マシアケをここでは「厳格」と訳したが、文脈によつては「兇暴」「気まぐれ」「わがまま」とも訳すこともできる。いずれの場合にも、「ふつうの人には手がつけれず、遠ざけておくべきもの」であるというニュアンスがともなっている。追いつめられた獣、怒りくるう人、泣きわめく子ども、理不尽な命

令をくだす白人など、すべて「マシアケ」という語で形容される。祖先もまた、近づくと何をしでかすかわからず、遠ざけて放置するしかないのである。

たとえば、ある種のタブーをおかすと祖先が怒り、タブーをおかした者を死にいたらしめる。近親相姦などの場合がそうである。ヴェズ社会では、系譜の知られるかぎりで共通の尊属をもつ男女は、その尊属から何世代離れていようと、性的な関係をもつてはならない。こうした親族に関する秩序を乱す者は、祖霊の怒りにふれ、死にいたる。たとえ違反者本人が死ななくとも、近い親族が突然の死を迎えなければならないという。

また、祖霊に対してしかるべき捧げものをしないと、やはり生者が死にいたることがある。ヴェズ社会では、祖霊に対する捧げものを頻繁におこなうわけではない。しかし、一部の祖霊は、夢枕に立ったり生者に疼痛を与えたりして、捧げものをおこなうよう要求することがある。捧げるものは場合によってまちまちで、タバコや酒、魚、米といったささやかなものですむこともあれば、ヤギやウシをまるまる一頭買つて殺すようにと祖霊が指示する場合もある。夢見によって祖霊の指示を受けた者は、すぐさま捧げものをおこなつて、祖霊の機嫌をそこなわないようにする。

また、別の場合には、近代的医学で説明できない疼痛を祖霊が生じさせる。疼痛をかかえる本人は、それが祖霊のしわざだと気づかないが、呪医や霊媒師の診断によつてそのことを知る。呪医とは、薬草や占いに關する知識をもつ者で、霊媒師とは、自分の体に精霊を乗り移らせて精霊の言葉や超能力を授ける者のことである。いずれも、近代的な医学が治療しえない病氣に対して問題解決の指針を与えるために、とくに村落部の生活には必要とされている。大多数の呪医や霊媒師は非職業的で、農業や漁業をおこなうかたわらで診断をおこなっている。彼らの診断により、祖霊が疼痛の原因であると判明した場合には、やはりウシなど適当な捧げものによつて、祖霊をなだめる措置をとる。

これをおこたると、疼痛が悪化し死にいたる。筆者も実際に、捧げものの不足によって死んだという人の噂を、いく度となく耳にした。

ヴェズ社会において、祖霊は、生者の運命を左右しうる超自然的存在なのである。そのような存在は、日常生活から遠ざけておくのがよい。墓と村との距離は、そうした観念を具体化したものと考えられよう。葬儀において死者への愛着を断ち切ることも、厄介ごとを未然に防ぐうえではおおいに効果があろう。

4. 年長者の力

ところで、「涙を断ち切る」方向で葬儀が仕立てあげられるのは、弔問客が多い場合だと書いた。弔問客が多いということは、すなわち、子孫が多いということである。未婚の若者が死んだ場合、いとこが葬儀に参加することはあるが、たんなるクラスメイトが集まることは少なく、したがって葬儀の規模も小さいのがふつうである。それに対して既婚者の場合には、配偶者の親族たちが集まるから、それだけで規模が大きくなる。しかし、それでもまだ大規模とはいえない。子や孫がそれぞれに結婚して姻族をもつてはじめて、葬儀が多様な親族グループの交流会として組織され、にぎわいをみせるようになる。

多くの子孫をもつ者の葬儀では、「涙の断ち切り」が演出される。未婚者など、年少者の場合には、そうした演出が顕著でない。このことは、すでに述べた「死者の厳格さ」の観点から説明できる。じつは、死んだ年少者の霊は「厳格」でなく、それほどおそれられてもいない。筆者の聞いたかぎり、年少者の霊が夢枕に立って捧げものをねだった例はなかった。

ヴェズの人びとは、日ごろから年長者を尊ぶいっぽう、年少者に対しては言いつけをはばからない。この関係は、死んでしまった相手に対しても、ひき続き維持されるのである。

ヴェズの人びとが年長の世代を尊ぶことは、次のような点から明らかである。まず、年長者には、名まえでなく親族呼称で呼びかけること。目線をさえぎるように前を横切ろうとしないこと。どうしても横切る必要があれば、腰をかがめて手刀を切るしぐさをする。年長者の前では、ひざを立ててすわらないこと。年少者に対しては、これらの氣づかいをすることはない。

子どもをもつような年齢にある者は、たんに年長であるというだけの理由により、子どもと同じ年ごろの者から敬意を払われる。そこからさらに年をとり、子どもが結婚して孫ができると、村のなかで一目置かれるようになる。

さらに孫が増えれば、たんに年少者に対してのみ威厳をもつでなく、絶対的な風格のようなものが身につく。たとえば、村を離れる者に対して、「さよなら」「いつていらつしやい」というかわりに、祝福を与えるようになる。

「ぶじに目的地に着けますように、そこで何ごとも起りませんように」、「神さま」彼をお守りください、彼が安らかでありますように、そしてまたここに戻って来れますように。」これは、別れる相手に対して言っているのではない。運命をつかさどる神に対して祈っているのである。こうしたふるまいは、若い者にはけつてみられない。子孫が増えると、このように神とのあいだを仲立ちするふるまいが、自然に身につくようなのである。

じつさい、男女をとわず老人たちは、そこに存在するだけで子孫たちを守護しているかのように思える。彼らは、日中のほとんどを屋敷地の近くですごし、食べものや金を家に持ち帰ることはめったにない。それにもかかわらず、子や孫たちから頼りにされる。そうした自負心は、子や孫以外の者といるときにはたらくのだろう。わたしは、ヴェズの村に親戚がいるわけではないが、日本に帰ると告げに行くと、しばしば訪問先の年長者が出てきて祝福を与え

てくれる。

このように、人びとは、生涯をつうじて少しずつ「力」を増していく。その「力」とは、まず子どもたちを従わせる力に始まり、おとなの社会に対する影響力、老人ならではの風格（老人力？）へと、すこしずつ大きくなっていく。そして老人の死後、この力は、あの世からこの世へはたらきかける能力へと変化する。この能力により、祖先は生者の夢枕に立ったり、生者に疼痛を与えたりできるようになる。生者にとって、この能力は脅威である。

生活をおびやかしかねない死者を、生者はできるだけ遠ざけようとする。その努力は、葬儀のときにすでに始まっている。葬儀において、生者はにぎやかに盛りあがり、近しい遺族の涙を断ち切る。幼い死者に対しては、このようなことはおこなわれない。これは、幼い死者は生者に対して影響力をもたないためである。力をもった年長の死者との断固たる訣別、それが、ヴェズ社会におけるにぎやかな葬儀の意味である。

〈参考文献〉

- Astuti, Rita 1994. Invisible objects: Mortuary rituals among the Vezo of western Madagascar. *Res. Anthropology and Aesthetics* 25: 111-122.
- Astuti, Rita 1995. *People of the sea. Identity and descent among the Vezo of Madagascar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Deschamps, Hubert 1965. *Histoire de Madagascar*. Paris: Éditions Berger-Levrault.
- 飯田卓 2008a. 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』世界思想社。
- 飯田卓 2008b. 「ミケアとヴェズ——マダガスカル南西部の採食民」綾部恒雄（監修）福井勝義／竹沢尚一郎／宮脇幸生（編）『講座世界の先住民族 ファーストピープルの現在 5 サハラ以南アフリカ』明石書店, pp. 303-317.